

# 錢形平次捕物控

金色の処女

野村胡堂

青空文庫



「平次、折入つての頼みだ、引受けてくれるか」

一

これは銭形平次の最初の手柄話で、この事件が平次を有名にしたのです。この頃お静はまだ平次の女房になつていはず、ガラツ八も現われてはおりません。

## 「へエ——」

銭形の平次は、相手の真意を測り兼ねて、そつと顔を上げました。二十四五の苦み走つた好い男、藍微塵あいみじんの狭い捨に膝小僧ひざこぞうを押し隠して、弥蔵に馴れた手をソツと前に揃えます。

「一つ間違えば、御奉行 朝倉石見守あさくらいわみのかみ様は申すに及ばず、御老中方にとつても腹切り道具だ。押付けがましいが平次、命を投げ出すつもりでやつてみてはくれまいか」

と言うのは、南町奉行与力の筆頭よりき 笹野新三郎ささのしんざぶろう、奉行朝倉石見守の智恵袋と言われたほどの人物ですが、不思議に高貴な人品骨柄です。

「頼むも頼まないもございません、先代から御恩になつた旦那様

の大事とあれば、平次の命なんざ物の数でもございません。どうぞ御遠慮なくおっしゃつて下さいまし」

敷居の中へいざり入る平次、それをさし招くように座布団を滑り落ちた新三郎は、

「上様には、また雑司ぞうしケ谷やの御鷹狩おたかがりを仰せ出された」

「エツ」

「先頃、雑司ケ谷御鷹狩の節の騒ぎは、お前も聞いたであろう」「薄々は存じております」

それは平次も聞き知つておりました。三代將軍家光公が、雑司ケ谷鬼子母神のあたりで御鷹を放たれた時、どこからともなく飛んで来た一本の征矢そやが、危うく家光公の肩先をかすめ、三つ葉葵

の定紋を打つた陣笠の裏金に滑つて、眼前三歩のところに落ちた  
という話。

それツと——立ちどころに手配しましたが、曲者くせものの行方ゆくえは更  
にわかりません。

後で調べてみると、鷹の羽はを矧はばかいだ籠深のぶかの真矢ほんやで、白磨き二寸  
あまりの矢尻には、松前の人々が使うという「トリカブト」の毒  
が塗つてあつたということです。

「その曲者も召捕らぬうちに、上様には再度雜司ヶ谷の御鷹野を  
仰せ出された。御老中は申すに及ばず、お側そばの衆からもいろいろ  
諫言かんげんを申上げたが、上様日頃の御気象で、一旦仰せ出された上  
は金輪際変替えは遊ばされぬ。そこで御老中方から、朝倉石見守

様へ直々のお頼みで、是が非でも御鷹野の当日までに、上様を遠矢にかけた曲者を探し出せとのお言葉だ、なんとか良い工夫はあるまいか」

一代の才子 笹野新三郎も、思案に余つて岡つ引風情の平次に縋り付いたのです。

「よくおっしゃつて下さいました。御用聞冥利、この平次が手一杯にお引受け申しましよう。ついては旦那、私が聞きたいと思うことを、みんな隠さずにおっしゃつて頂けましようか」

「それは言うまでもない事だ、なんなりと腑に落ちない事があつたら訊くがよい」

「ではお尋ねしますが、上様を雜司ヶ谷の御鷹野に引付けるのは、

なんか深い仔細しきいがございましょう。小鳥のいるのは雑司ヶ谷ばかりじゃございません、目黒めぐろにも桐ヶ谷きりやにも千住せんじゅにも、この秋はことの外獲物が多いという評判でございます。それがどうしたわけで——

「これこれ、段々声が高くなるではないか」

「へエ——、でもこれが判らなかつた日には手のつけようがございません」

「話すよ——、薄々世間でも知つてのことだ——、雑司ヶ谷の鷹野の帰り、上様には決つて、大塚御薬園へ御立寄りになる、あの中には新築した高田御殿で、一椀の御薬湯を召上がるのが、きつといお楽しみだ」

「と申しますと」

「世上の噂でも聞いたであろう、御薬園預りの本草家、峰宗寿軒の娘お小夜は、府内にも並ぶ者なしという美人だ」

「そうでござりますつてね、上様も全くお安くねえ」

「コレコレ、何を申す」

「へエ——、だが、有難うございました。それだけ伺えば大方筋はわかります。仔細あつて私もお小夜の顔ぐらいは存じておりますが、あの女はどうしてどうして一筋縄でいける雌じやございません——、宜しゆうございます。乗るか反るか、平次の出世試し、命にかけてもやつてみましよう」

平次の若々しい顔には、感興（インスピレーション）にも似たものがサツと匂つ

て、身分柄の隔たりも忘れたように、胸をトンと叩いて見せました。

「御鷹狩の日取りは明後日あさつてだ。ぬかりはあるまいが、そのつもりで——。拙者には拙者の工夫がある、油断をすると、手柄比べになろうも知れぬぞ」

「へエ——」

二人は顔を見合せて、会心の微笑を交しました。与力と岡つ引では、身分は霄壤てんちの違いですが、なんかしらこの二人には一脈相通する名人魂があつたのです。

大塚御薬園、一名高田御薬園というのは、今の音羽の護国寺の境内にあつたもので、一万八千坪の中に有名な薬師堂<sup>やくしどう</sup>、神農堂<sup>しんのうどう</sup>をはじめ、將軍臨場の時のために、高田御殿という壯麗なる御殿まで出来ていました。

総檜<sup>そうひのき</sup>の破風<sup>はふづく</sup>造り、青銅瓦<sup>さび</sup>の鋪も物々しく、数百千種の薬草靈草から発する香氣は、馥郁<sup>ふくいく</sup>として音羽十町四方に匂つたと言われるくらい、幕府の御薬園の權威は大したもので、もとより岡つ引や御用聞などの近付ける場所ではありません。

与力笛野新三郎の屋敷を飛出した錢形平次、いきなり大塚へ飛んで来て、この薬臭い塀にヘバリ付きましたが、場所が場所だけ

に、どう工面しても入り込む工夫が付かないのです。

丸半日、気のきかない空巣狙いのような事をしていった平次も、その日の昼頃には、とうとうシビレを切らしてしまいました。

「チエツ」

舌打を一つ、袂たもとから取出したのは、その頃通用した永楽錢が一枚です。てのひら掌へ載せて中指の爪と親指の腹で弾くと、チン——と鳴つて、二三尺空中に飛上ぜにうらがります。落ちて来るところを掌で受けると、これがそのまま錢せん占たなぞこ。

「帰れっていうのか、よし」

錢を袂に落すと、そのまま屏を離れて、音羽の通りへ真っ直ぐに踏出しました。これが銭形平次という綽名あだなの出たわけの一つ。

もう一つ、平次には不思議な手練があつて、むつかしい捕物に出くわすと、二三間飛退つて、腹巻から鍋銭を取出し、それを曲者の面体目がけてパツと抛り付けます。薄くて、小さくて、しかもちよつと重い鍋銭ですから、不用意に投げられると、泥棒や乱暴者などは、キット面体をやられます。ひるむところを付け入つて捕る、このこつはまことに手に入つたもので、銭形の平次というと、年は若いが悪党仲間から鬼神のごとく恐れられたものです。

その平次が見限つたのですから、御薬園の屏の中の秘密は容易のことではありません。腹立ち紛れの弥藏を拵えて、長い音羽の通りを、九丁目まで来ると、ハツと平次の足を止めたものがあり

ます。目白坂の降おりくち口に、紺暖簾こんのれんを深々と掛け連ねて、近頃出来ながら、当時江戸中に響いた「唐花屋」からはなやという化粧品屋、何の気もなく表へ出した金看板を読むと、一枚は「——おん薬園おんやくえんへちまの水——」、次のは「——南蛮秘法、おん白粉おしろい——」、そして更にもう一枚には「——峠流秘薬色々——」とあります。

「これだツ」

平次は思わず顎あごを引きました。

### 三

「お静坊しふぼう居るか」

「あら親分」

その頃東西の両国に軒を並べた水茶屋の一つを覗いて、平次はこう声を掛けました。

「よう、相変らず美しいね、罪だぜ、お静坊」

「あら親分、そんな事を言うなら、私は嫌」

「どっこい、謝った。逃げちやいけねえ、今日は大真面目に頼み事があるんだ。静ちゃんは、近頃評判の音羽の唐花屋へ買物に行つた覚えはないか」

「いいえ、朋輩衆で唐花屋へ行かない人はないほどだけれど、私はまだ行つたことはありません」

「そうだろうねえ、お前ほどの容貌<sup>きりょう</sup>じや、へちまの水にも南蛮

渡来の白粉にも及ぶめえ」

「あれ、親分さん」

なるほどこれは美しい容貌です。せいぜい十七八、血色の鮮やかな瓜実顔に、愛嬌あいきょうがこぼれるばかり。襟の掛った木綿物に、赤前垂こそしめておりますが、商売柄に似ず固いが評判で、枝から取り立ての果物のような清純な感じのする娘でした。

「実は少し無理な頼みだが、半日暇をもらつて、唐花屋まで買物に行つて貰いたいんだが、どうだろうネ、静坊」

「え、え、行つて上げるわ」

なんというわだかまりのない返事でしよう。

「そいつは有難ありがてえ、それじや御意の変らぬうちに——」

岡つ引と水茶屋の娘ですが、どちらも水際立つた美男美女で、二人の胸には、いつの間にやら淡い恋心が芽ぐんできたのでしょう。とにかく話の運びの早いことは大変です。

両国から小日向まで駕籠かご、そこからわざと歩いて、唐花屋の入口に着いたのはかれこれ酉刻むつ（六時）近い刻限でした。髪形をすっかり堅気の娘風にしたお静の後ろ姿——黄八丈の袴あわせと緋鹿ひかの子帶こが、唐花屋の暖簾のれんをくぐつて見えなくなつた時は、大日坂だいにちざかの下から遠く様子を見ていた銭形の平次も、さすがに眼の前が真つ暗になるような心持がしました。唐花屋がどうという、突き止めた疑いがあるわけではありませんが職業的第六感とでも言いましょうか、——このままお静を犠牲いけにえにするのではあるまいか——

といった予感が、平次の頭をサツとかすめて去つたのです。

「へちまの水を下さいな」

お静は一向そんな事を構いません。物馴れた調子で日傘を畳みながら、店がまちへもう腰を下ろしております。

「へエ、いらっしゃいまし。ちょうど今年採つたばかりの新しいのがござります。これ徳とくどん、そこからお入れ物を持って来てお眼にかけな」

美しい客と見ると、馴れているはずの店中も、何となくザワついて、二三人の番頭手代が、磁石に吸付けられる鉄片のように、左右から寄つて参ります。

「それからアノ、白粉も貰つて行きましょう」

「へエへエ」

「それにお紅も」

おおたば

ベニ

「

近頃出来の店構えで何となく真新しい普請ですが、そのくせ妙に陰気で妙に手丈夫に出来ているのが、娘の纖弱デリケートな神経を圧迫します。

「お茶を召し上がるがつて下さいまし」

若い丁稚でつちが、店使いにしては贅沢ぜいたくすぎる赤絵の茶碗に、これも店使いらしくない煎茶をくんで、そつとお静の傍そばにすすめました。

「有難うよ」

身<sup>みなり</sup>扮に相応した堅気の娘なら、この茶は飲まなかつたかも知れませんが、お静は水茶屋の女で、お茶を汲むことも汲ませることも馴れております。桃色珊瑚<sup>さんご</sup>を並べたような美しい指でそつと受け、馴れた様子で一と口、二と口。

「オヤ——？」

お茶にしては妙に甘い、そして香氣が可怪しいと思ひましたが、三口目には綺麗に飲んでしまいます。

それから口の小さい素焼の徳利へへちまの水を詰めさしたり、白粉と紅とを取り揃えたり、お鳥<sup>ちようもく</sup>目を出そうとして帯の間へ手をやつた時は、先ほどから我慢していた恐ろしい眠気が急に襲つて来て、性<sup>しょう</sup>も他愛もなく美しい島田鬚<sup>まげ</sup>がガツクリ前へ傾きました。

「徳どんは外を見張れ、お前は手を貸せ」  
 大番頭が立ち上がりつて指図をすると、馴れた様子で、バタバタ  
 と不思議な作業が始まります。

「へッ、こいつは全く掘り出し物だ」

「シツ」

二人の若い手代に抱き上げられたお静は、死んだもののように  
 なつて、赤い裳もすそと白い脛はぎとが、ダラリと下にこぼれます。

音羽の通りはしばらく絶えて、大日坂の下には、宵闇に光る眼、  
 錢形の平次は全く気が気じやありません。

この時はじめて平次は、近頃江戸中で評判になつた美しい娘が、頻繁に行方不明になることに思い当りました——芝伊皿子の荒物屋の娘お夏なつ、下谷竹町の酒屋の妹おえん、麻布笄町あざぶこうがいちょうで御家人の娘こけにんお幸こう——、数えてみると、この秋になつてからでも三人ほど姿を隠しております。それも選えり抜きの美人ばかり、書置きも何にもないから、まるで神隠しに逢つたようなのですが、それが早くて三日目、遅くとも七日目には、二た目とは見られぬ慘殺死体となつて、川の中、林の奥、どうかすると往来の真ん中に捨ててあるという始末です。

南北町奉行は、配下の与力同心に命じ、江戸中の御用聞を総動

員して、この悪鬼のような犯人を探させましたが、何としてもわかりません。犯人がわからないばかりでなく、何の目的で選り抜きの美しい娘ばかり殺すのか、皆暮見当も付かないのです。そのうえ死体は、洗い落してはあるが、歴々と全身に金箔を置いた跡があります。

「これだこれだ」

銭形の平次は一人<sup>うなず</sup>頷きながら、宵闇の中をすかして、唐花屋の裏口から出て行く駕籠<sup>かご</sup>の後を追いました。その中にお静を入れてあることは最早疑う余地はありません。

駕籠に無提灯<sup>むちょううちん</sup>のまま、音羽の裏通りを真っ直ぐに、今の護国寺、その頃の大塚御薬園の裏門へ、呑まれるように入つてしまい

ました。

「やはりそうだ」

平次はこのまま引っ返して、 笹野新三郎に報告した上、 御薬園へ手を入れさせようかと思いましたが、 御薬園の見識は大したもので、 若年寄直々の指令を受けなければ、 町奉行では手の付けようがありません。 そんな事で暇取つて いる内に、 お静の命が絶たれては一大事。

「まずお静を助けよう」

後で考えると、 それはたぶん盲目的になりかけていた、 平次の恋心がさせた思案でしょう。 前後の考えもなく木蔭の土塀に手が掛ると、 平次の身体は軽々と塀を越えて、 閨の御薬園の中へポン

と飛込んでしました。

それから何刻経つたか、どこをどう通つたかわかりません。

一万八千坪の御薬園の中、茯苓、肉桂、枳殼、山楂子、吳茱萸、川芎、知母、人參、茴香、天門冬、芥子、イ

モント、フナハラ、ジキタリス——幾百千種とも數知れぬ藥草の繁る中を、八幡<sup>やわた</sup>知らずにき迷い歩いた末、わずかの灯<sup>あかり</sup>を見付けて、真つ黒な建物の中へスルリと滑り込んでしました。

それはたぶん有名な高田御殿だつたでしよう。とにかく、非常に宏壯な建物で、人目を忍ぶにはまことに好都合です。廊下から部屋へ、納戸へ、梯子段<sup>はしごだん</sup><sup>あかり</sup>へと、人と灯を避けて拾つてゐるうちに、いつの間にやら平次は、天井裏の密閉した一室へ入り込んで

おります。

ハツと思つて出口を探しましたが、どんな仕掛けがあつたか、四方一様に檼の厚板で、戸や窓はおろかなこと、蟻の這い出る隙間もあろうと思えません。

「チエツ、勝手にしやがれ」

度胸を据えてドツカと坐ると、不思議なことに、床板のあちこちから、大きく小さく、下の大広間の灯が漏れております。

よく見ると、それは悉くギヤマンを張つた穴で、この天井裏から、下の様子を覗くために出来たのでしよう。——これは後で見ると、悉く下の大広間の格天井に描かれた、天人の眼や、蝶々の羽の紋や、牡丹の蕊などであつたということです。

## 五

最初平次の眼に入つた光景は、広間の中央に祀まつられた、何とも形容のしようのない醜惡怪奇を極めた魔像で、その前と両側には、真つ黒な蠅燭ろうそくが十三本、赤い焰ほのおをあげてメラメラと燃えております。

魔像の前には蜥蜴とかげの死骸、猫の脳味噌、半殺しの蛇といった不気味な供物が、足の高い三さんぼう方に載せて供えられ、その供物の真ん中に据えた白木の大俎板おおまないたの上には、ピチピチした裸体が仰向あおむけに寝かされて、その側には磨き立てた出刃庖丁そばが、刃先を下に

してズブリと板の上に突つ立っています。

「アツ」

さすがの平次も、思わず唇を噛みました。俎板の上の赤ん坊は、泣きも叫びもせず、好い心持そうにニコニコしているのが、四方の陰惨な空氣の中に、不思議な対照を描き出して、身の毛のよだつような氣味の悪い情景です。シーン

突然、今まで聞いた事もないような、陰惨な合唱と共に、一隊の男女が、妖魔の行列のように広間へ入つて来ました。いずれも真つ黒な覆面、その間から、眼ばかり光らして、覆面越しの読経の声も、なんとなく陰に籠ります。

続いて燃え立つような真紅の布きれを纏まとつた四人の女が、一人の娘

を伴つて現われました。夢見るような足取りで、無抵抗に台の上に押し上げられたのを見ると、こればかりは町娘の服装をしたお静の囚<sup>とら</sup>われの姿だつたのです。

「あッ、とうとう」

あまりの事に平次は、もう少しで声を立てるところでした。人間の力でこの密室が押し破れるものだつたら、どこかの羽目を踏み碎いても飛出したであろうが、それとても出来ないことです。

また、ひとしきり奇怪な読経が湧き起つて、魔像とお静の四方<sup>まわり</sup>を、黒装束の人間の輪が、クルクルと廻り始めました。

それからしばらく続いて、広間は元の静寂に還<sup>かえ</sup>ると、不意に、人間の輪はサツと散ります。見ると、台の上に立つたお静はいつ

の間にやら、黒装束の魔僧達の手で、十七処女おとめの若々しい肌へ、ベタベタと金箔を置かれているところだつたのです。お静は魂の抜けた人形のように、少し仰向き加減に突つ立つたまま、なすがままに任せて身動きもしません。

やがて処女の上半身に金箔を置き終ると、黒衣長身の長老とも見える男は、黒頭巾の覆面を取つてお静の前に近づきました。

「あツ」

平次はもう一度声を立てるところでした。その男といふのは、燃えるような赤毛に、白子のような肌をした碧眼へきがんの大男で、紅毛人うもうじんを見た事のない平次の眼には、地獄変相図から抜け出した、悪鬼のように恐ろしく映つたでしょう。

続いて覆面を除つたのは、この薬園の預り主、峰宗寿軒です。  
半白の中老人で、立居振舞に何となく物々しいところがあります。

二人は前後して進んで、金箔を置いた処女の肩へ唇を触れました。続く黒装束の五六人も、悉く覆面を外して、同じように処女の身体へ唇の雨を降らせます。

この冒流的<sup>ぼうりゅうてき</sup>な行法が、どんなに平次を怒<sup>いか</sup>らせた事でしょう。お静の淨らかさを救うために、どんな事をしても——とあせりましたが、この密室はどんな設計で出来たものか、二た刻あまり探し抜いても、どうしても入った場所がわかりません。

その内に、下の広間がまた賑やかになりました。と見ると、焰<sup>ほのお</sup>

のような赤い布きれを纏つた、半裸体の四人の美女は、人面獣身の魔像と、金箔を置いたお静を中心にして、あらゆる狂態を尽して乱舞を始めたのです。

魔像の前の大香炉には、幾度も異香が投げ込まれました。天井裏でそれを嗅ぐと、平次の心持も、うつらうつら夢見るようになります。

幾度か醒めては、広間の様子を覗き、幾度か気を喪つては何刻となく深い眠りに陥おちりました。——これではならぬと——満身の力を両の拳にこめ、両眼を見開いて氣を励ました。泥酔した人のように崩折れて、その努力も永くは続きません。

金色こんじきの処女おとめ——お静の上に加えられる、あらゆる辱はずかしめと、

怪奇至極の大儀式が、断片的に平次の眼と耳に焼き付けられながら、そのまま遠い遠い過去の出来事のように、他愛もなく消えて行きます。

## 六

明くれば十月九日、三代将軍徳川家光は近臣十二名を従え、微行の姿で雑司ヶ谷へ鷹狩に出かけました。十二人の内四人は將軍と同じ装いをした近習きんじゆ達、四人は鷹匠、との四人は警衛の士で、微行とは言いながら、この時代にしては恐ろしく手軽です。もつともこれは家光自身の命令で、目障りになるような士卒は、

間近に置かれなかつたまでのこと、音羽から小日向、大塚へかけては、何千とも知れぬ警護の士で、蟻の這い出る隙間もなく固めております。

この日はことの外不猶だつたせいか、家光は恐ろしく不機嫌で、近習達とろくろく口も利きません。鷹狩が済むと、待ち構えていたように音羽へ下つて、大塚御薬園の高田御殿へお入りになります。

御薬園の門前に迎えたのは、峠宗寿軒、五十がらみの總髪で、元々本草家で武士ではありませんが、役目ですから、麻袴あさがみしもを着けて将軍を高田御殿へ案内します。

奥の一と間、贅ぜいを尽した調度の中に納まると、近習達も遠慮を

して、將軍を存分にくつろがせなければなりません。高麗縁の青畠の中、脇息に凭れて、眼をやると、鳥の子に百草の譜を書いた唐紙、唐木に百虫の譜を透かし彫にした欄間、玉を刻んだ引手や釘隠しまで、この部屋には何となく、さり気ないうちに漂う一抹の怪奇さがあります。

この時、女の童に襖を引かせて、茶碗を目八分に捧げて入つて来たのは、峠宗寿軒の娘お小夜です。曙色に松竹梅を総縫いした小袖、町風に髪を結い下げた風情は、長局風俗に飽き飽きした家光の眼には、どんなに美しいものに映つたでしょう。年の頃は二十二三、少しふけておりますが、その代り町家にも武家にもない、滴したたるような美しさがあります。

恐れる色もなく、家光の前に進んで、近々と茶碗を進め、二三歩退つて、

「お薬湯を召し上がりませ」

わだかまりもなく言つて、俯向うつむき加減に莞爾にっこりします。こんな

無礼な仕打は、日頃の家光には見ようたつて見られません。大名が廓通くるわいに夢中になつたように、將軍家光が雑司ヶ谷の鷹狩に夢中になつたのも無理のないことです。

「…………」

家光は黙つて茶碗を取り上げました。本草家峰宗寿軒の煎じた薬湯、別に何の薬というでもありませんが、神氣を爽やかにして、邪氣を払う程度のもの、唇のところへ持つて行くと、高価な薬の

匂いがブーンとします。

## 七

天井裏に閉じ籠められた錢形の平次、幾刻——いや幾日眠らされたかわかりません。フト眼を覚すと、四方はすつかり明るくなつて、天井裏ながら埃の一つ一つも読めそうです。怪奇な舞踊を思い出して、嘔氣を催すような不愉快な心持になりましたが、お静の安否が心もとのないので、もう一度ギヤマンの穴から覗くと、広間は広々と取片付けられて、白日の光が一杯にさし込み、忌わしい物など影も形もありません。

思い直して出口を探すと、今度はわけもなく見付かりました。

壁は同じような檼の厚板で張り詰めてありますから、一箇所だけ手摺れがして、出入口ということはすぐわかります。しばらく押したり叩いたりしてみると、どうした弾みか、いきなりスースッと開きます。たぶん扉の下の踏み板に仕掛けがあつたのでしよう。

一と足漲みなぎるような白日の光の中へ飛出しましたが、困ったことに、庭にも廊下にも、広間にも玄関にも、夥おびただしい人間がたかつていて、天上裏から飛出したままでは、大手を振つて出て行くわけに行きません。

「あッ、いけねえ。今日は上様の御鷹狩の日だ」

霞んだような平次の頭にも、これだけの記憶が蘇よみがえつてきました。

今日までに毒矢の曲者くせものをつかまえるはずだつたのが、天井裏に閉じ籠められてすっかり予定が狂つてしまつたのです。

「こいつはしまつた」

平次は天井裏で地踏鞴じだんぱを踏むばかりです。

それからまた何刻か経ちました。御殿の中の空気は遽かに緊張して、

「上様のお着き」

という囁きささやが、隅々までも行き渡ります。

上様お着きというのは、御鷹野は無事だつたという証拠にもなりますから、天上裏の平次もそれを聞いてホツとします。

「間違いがあれば、この御殿内だ。よし、それならば、まだ望み

がある」

しばらく泥棒猫のよう、天井から天井へ、梁<sup>はり</sup>から梁へと渡つて歩いた平次、いつの間にやら、羽目からスルリと抜け出して、離れの廊<sup>ひさし</sup>の下に這い込んでしまいました。首を少し曲げると、一枚開け放つた障子の中に、上段の高麗縁が見えて、豊かに坐つた黒羽二重の膝も見えます。

「上様だツ」

平次はヒヨイと首を引きました。と同時に小夜が捧げた薬湯の茶碗が見えます。

やがて家光は薬湯を手に取り上げた様子、それと同時に平次の眼には、もう一つ動くものが映ります。それは障子の外に、物の

隈のくまようにうすくま踞つた総髪の中老人、あられこもんかみしも霰小紋の袴を着て、折目正しく両手をついておりますが、前夜怪奇な行法を修した、この薬園の預り主、峠宗寿軒に違ひありません。

家光が茶碗を取り上げて、唇まで持つて行くと、宗寿軒の唇が歪ゆがんで、障子を射通すような瞳が、キラリと光ります。

「あツ、毒湯だツ」

捕物の名人、錢形平次には、外の人には第六感が働きます。前後の事情から考え合せてみると、家光の手に持つている茶碗の中に、眞面まともな薬湯が入っているわけはありません。

笛野の旦那がくれぐれも頼んだのは、これだツ。

平次はいきなり廂から飛出そうとしましたが、たかが岡つ引、

将軍様の前へ飛出せるわけもなく、大きい声を出そうにも、その辺の物々しいたたずまいを見ると、うつかり騒ぎを大きくして、相手に捨鉢<sup>すてばち</sup>に出られると、かえつて恐ろしい事になりそうです。それに毒湯と思うのは、平次の單なる疑いで、実は本当の薬湯を勧めているのかもわからないのです。

ハツと気が付いて腹巻を探ると、折悪しく鍋銭はありませんが、小粒が二つ三つと、それに柄にもなく小判が一枚あります。その頃の小判は大変な値打で、岡つ引などにとつては一と身代ですが、一昨日<sup>おととい</sup> 笹野新三郎から用意のために手渡された金、将軍様の命に關わろうという場合ですから、物惜しみなどをしている時ではありません。

いきなり小判を右手の拇指と食指との間に立てて、小口を唾<sup>つば</sup>で濡らすと、銭形の平次得意の投げ銭、山吹色の小判は風を切つて、五六間先の家光の手にある茶碗の糸底<sup>いとぞこ</sup>に発矢<sup>はつし</sup>と当ります。薬湯は飛散つて、結構な座布団も畳も滅茶滅茶。

「…………」

家光は動ずる風もなく、面<sup>おもて</sup>をあげて小判の飛んで来た方を屹<sup>きつ</sup>と見やります。

「あツ」

驚いたのはお小夜、起<sup>た</sup>ち上がりると、いそいそと近寄つて、薬湯に濡れた家光の膝へ、身体と一緒に、縫い松竹梅の小袖を、サツと掛けました。

## 八

「これ、何をする——」

あわてて居住いを直す家光の膝を追うように、お小夜は袖の上へ顔を伏せました。

次の瞬間には、

「にせもの  
膺者ツ」

と彈はじき上げられたよう起ち上がります。

「漸ようやく気が付いたか」

「エツ、口惜しい、お前は誰だえ」

飛退く女の帯際を猿臂えんびを延してむんずと掴つかんだ偽家光。

「与力 笹野新三郎、上様の御姿を拝借して、そのほう親娘おやこの企みを見破りに参つたのだ。神妙にしろ」

と、高い声ではありませんが、ツイ調子に乗つて名乗りを上げてしましました。

これが非常に悪かつた——というのは、障子の外で、深怨の眼を光させていた峠宗寿軒、娘の声にハツと驚いたところへ、続いて 笹野新三郎の名乗りです。思わず起ち上がるのへ冠せて障子の内から、

「父上ツ、露見——早く、早く、地雷火ツ」

と娘のお小夜が悲痛な声を絞ります。

「おツ、娘、さらばだぞツ」

ヒラリと縁側から飛降りると、廂の上から銭形平次が、パツと飛付くのと一緒でした。

「野郎ツ、どこへ失せやがる<sup>う</sup>」

もとより捕物の名人、寸毫<sup>すんごう</sup>の隙もありませんが、困つたことに宗寿軒は思いの外の剛力で、それに平次は、まる二日物を食わない上、廂から飛降りる機みに足を挫いて、進退駆引自由になりません。

「エツ、面倒」

二人はそれでも負けず劣らず捻じ合いました。あまりに咄嗟の出来事で、遠ざけられた近習達が、駆け付ける暇もなかつたので

す。

そのうちにお小夜の帯がバラリと解けました。銀の厚板の一と抱えほどあるのが、 笹野新三郎の手に残ると、お小夜は脱兎のごとく身を抜けて、

「父上、地雷火は私がツ」

「お、娘頼むぞツ、あの犠牲いけにえも逃がすなツ」

親娘は最後の言葉を交すと、総縫い松竹梅の小袖は、大鳥のようにサツと奥へ飛込みます。

犠牲と聞いて平次は驚きました。捨鉢になつた宗寿軒父娘が、地雷火で高田御殿を吹き飛ばすとなると、あの可哀想なお静の命はひとつまりもありません。金箔を置いて一度は祭壇に載せた処お

女の身体は、いざれあの広間のどこかに隠してあるに相違ないで  
しよう。

「笠野の旦那、こいつを頼みます」

「お、心得た」

その内に遠慮して遠退いていた近習達も、騒ぎを聞いて駆け付ける様子。平次は猛然として突つかかって来る宗寿軒を、一つかわして芝生の上に叩きのめすと、身を退いてサツとお小夜の後を追いました。挫いた足首は、焼金を当てるようになりますが、今はそんな事を言つている場合ではありません。

勝手を知つた大広間の中へ入ると、ブーンと鼻を衝く煙硝の匂い、地雷火の口火は早くも点けられたのでしよう。

今さら事の危急な勢いに、平次はゾッと総毛立ちましたが、お静を匿した場所はまるで見当が付きません。

「お前は錢形平次、もう駄目だよ。一緒に死ぬばかりだ」

呵々と氣違いじみた笑いを突走らせるのは、黒髪も衣紋も滅茶滅茶に乱した妖婦お小夜、金泥に荒海を描いた大衝立の前に立ちはだかって、艶やかに邪な眼を輝かせます。

「やい、女、あの娘をどうした」

「知らない」

「いや、知つているはずだ、言えツ」

「言わない、——どうしても言わない、私達をこんな羽目に陥し込んだのはお前だろう。——その代りお前の名前を譖言に言つ

て いるあの娘は、この御殿と一緒に木端微塵こつぱみじんに碎け散るよ。好い  
氣味だ、——あれはお前の情人いろだろう。知らなくつてさ、——お、  
もう口火は燃え切つた、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ

「いや、俺はお静を助けてみせる」

「馬鹿なツ」

荒海の衝立、怒り狂う紺こんじよう青の波なみ頭がしらを背にして、小袖の  
前を搔き乱したまま、必死の笑いに笑い狂う美女の物凄さ。物慣  
れた平次も、思わずタジタジと退すさりましたが、次第に激しくなる  
煙硝の匂いに、もう一度氣を取り直して、毒蛇の眼のごときお小  
夜の瞳を、精魂こめて凝じつと見詰めました。

「解るまい、もう最後だ。それツ」

「いや、解つた」

何を考えたか平次は、猛然としてお小夜の身体に飛び付きました。細腕を取つて引退け、荒海の衝立をサツと前へ引倒すと、その背後うしろにあるのは「御葉草」と書いた御用の唐櫃からびつ、力任せに蓋をハネると、中から燐さんとして金色無垢こんじきむくの処女の姿が現われます。

全身に金箔を置かれたお静は、半死半生のままこの中に入れられて、捨てるか殺されるかする最後の運命を待つていたのでした。

「あッ、それを助けては」

後ろから縋すがり付くお小夜を蹴返して、金色の処女を小脇に痛む足を引摺つて外へ飛出す平次、——それと同時に、

轟然ごうぜん——天地も崩れるような物音。

天に冲する火焔の中に、高田御殿は微塵に崩れ落ちてしまいま  
した。

## 九

これは後でわかつた事ですが、峠宗寿軒の前身は、骏河大納言忠長の臣で、本草学の心得があるのを幸い、京都に行つてその道の蘊奥を極め、身分を隠して大塚御薬園を預かるまでに出世したのです。

主君忠長自殺の後は、なんとかして、家光に怨みを報じようと、  
泉州境で親しくなつた葡萄人スデロを呼び寄せ、高田

せんしゅうさかい  
ポルトガル

御殿の中に祭壇を設けて、ヨーロッパのちゅうせいに流行つた悪魔を祭神とする呪法を行つたのでした。これは切支丹と一緒く渡來した怪奇を極めた邪教で、その祭に夥しい犠牲を要するところから、腹心の者に命じて、音羽九丁目に唐花屋という小間物屋を出させ、江戸中の美女を釣り寄せては、その内でも優れた美人を誘拐かして犠牲にし、連夜ひそかに悪魔の呪法を修して將軍家光を調伏する計画だつたのです。

それも埒が明かないと見て、近頃は毒矢を飛ばしたり、娘お小夜の美色を餌に、毒湯をすすめて一拳に怨みを報じようとしましたが、奉行の朝倉石見守が老中に進言して、將軍家光に面差しの似た与力笛野新三郎を替玉に使い、見事にその裏を搔いて取つて

押えたのでした。

この呪法を修した大司教スデロは、幕府の手から葡萄牙船に引渡され、峠宗寿軒は詮議中に自殺してしまいましたが、娘のお小夜はそれつきりどこへ行つたかわかりません。

大塚御薬園は、その後まもなく取潰しになり、天和元年護国

寺建立の敷地として召上げられた事は人の知るところです。

こんな邪法が一時日本へ伝わったことは事実です。猥雜な呪

法や魔術をひろめて、どれだけ正統的な切支丹宗門の邪魔をしたかわかりませんが、その後、幕府の禁令が厳しかつたので、いつもなしに亡び失せてしまいました。

銭形の平次はこれだけの仕事をして、将軍の命を狙う怨敵を

平らげましたが、 笹野新三郎に約束した御鷹野以前に曲者を挙げることが出来なかつたのと、 事件の性質が性質なので、 表向きはその手柄に酬いられませんでした。 しかし、 家光の胸に銭形平次の名が印象深く記憶された事と、 金色の処女——お静の愛を確りしつか掴んだことだけで、 若い平次は満足しきつております。



# 青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（十）金色の処女」嶋中文庫、嶋中書店  
2005（平成17）年2月20日第1刷発行

底本の親本：「錢形平次捕物百話 第九巻」中央公論社

1939（昭和14）年8月5日発行

初出：「ホール讀物」文藝春秋社

1931（昭和6）年4月号

※副題は底本では、「金色《こねじき》の処女《おとめ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2017年12月26日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 銭形平次捕物控

## 金色の処女

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>